謡曲『姨捨』における老女と月と

――本説の検討を通しての本曲の主題の解釈をめぐって――

金　忠　永

一、問題の提起

『姨捨』の主題に関する有力な従来の説は、「美しい風光に思い入る清明さ」[1]「脱俗の老女を名所の月に配しての懐旧の遊舞」[2]「人の世を脱して浄化された美しい別世界」[3]などと、美しい別世界に思い入る脱俗した老女の姿を重く視る主題説が、主流をなしているといえる。

しかし、前場のシテのセリフにおいて、「いかに今宵の月の面白からんずらん」といった名月への期待感満ちたセリフから、「亡き跡までもなにとやらん物凄ましきこの原」[4]「風も身に沁む秋の心」「風凄ましく雲尽きて淋しき山の気色かな」などといった陰惨なトーンへの転調が見られることは、本曲の主題に関する前掲のような異説に一抹の疑問を持たしめるところである。

そこで本稿では、こうした老女のセリフにおける転調に着目し、本曲の主題とは、単に美化された世界での脱俗した老女というよりは、むしろ脱俗に憧れを抱きながらも、この世への愛執故に脱俗できぬ老女を描くところにあるのではなかろうかという点を考えてみることにしたい。

二、世阿弥における「姨捨の能」と「月」と

世阿弥能楽論書の『申楽談儀』に、「姨捨の能」における「月に見ゆるもはづかしや」の舞い方に関する芸談が次のようにある。

姨捨の能に、「月に見ゆるもはづかしや」、此時、路中に金を拾ふ姿有。申楽は、遠見を本にして、ゆくやかに、たぶ〳〵と有べし。然を、「月に見ゆるもはづかしや」とて、向かへる人に扇をかざして、月をば少も目にかけで、かい屈みたる体に有ゆへに、見苦しきなり。「月に見ゆるも」とて、扇を高く上げて、月を本にし、人をば少目にかけて、をぼ〳〵とし、し納めたらば、面白風成るべし。

ここで、「申楽は、遠見を本に」すべきというのは、舞台上の演能に当たり、観客をして広い遠景を想像せしめるように遠くを見渡すことを主とすべきだとの意で、[5]『姨捨』の能においても、「向へる人」（ワキ）よりは、「月」の方に気持ちを寄せて、舞台に向かう観客たちの想像の空間を広げるべきだとの意であろう。「月を本にし、

人をば少目にかけて」とあるのも、恥じる気持ちを、人よりむしろ「月」へ主に向かわせるべきだという意に解される。要するに、この『申楽談儀』の記述は、シテにおける「月」の重みを物語っている所と言えるのである。なお、この部分は「万事かゝりなり」という文を受けての芸談であり、「かゝり」が文辞と演技の相応から生じる風趣を意味するから、このくだりも、『姨捨』における「月に見ゆるもはづかしや」以降の文辞と演技とを相応させるための論と考えてよい。従って、対人関係よりは、「月」という天空にかかる対象に対して恥じる老女の心理に、『姨捨』一曲の主題が秘められていると世阿弥は考えていた、と見てよい。このことを本説の検討とあわせて考えてゆくことにする。(6)

三、本説の検討

『姨捨』の能作のモチーフは、『古今集』巻十七雑歌上に見える「わが心なぐさめかねつ更科や姨捨山に照る月を見て」の歌といえるが、この一首には詞書一つ付いておらず、その歌題も読み人もまったく知られていない。ということは、この歌が『古今集』時代においては、姨捨伝説とはかけ離れた純粋な名月賞美の歌として鑑賞されたことを窺わせる。しかし、姨捨山にまつわる棄老伝説は『古今集』成立以前から周知のものであったということが、現存するいくつかの歌から知られ、(7)さしあたり、中世にいたる歌意の伝統としては、「名月賞美の歌」と「姨捨伝説の歌」といった二つの解釈の可能性が考えられるのである。

こうした二つの解釈を許す歌をモチーフとして『姨捨』は生まれたわけであるが、本曲こそはこのような二つの解釈をむしろ積極的な形で一曲のモチーフに組み込んでいると見られる。そこでまず、この歌が『姨捨』以前の文学世界においては如何に理解されていたかを検討することから、本曲の理解に迫りたい。

この歌にまつわる姨捨伝説は、『大和物語』『俊頼髄脳』『今昔物語集』などに見られるのだが、この三書の話柄や歌の詠者には異同が見える。『大和物語』や『今昔物語』では、伯母を捨てた男の後悔の歌とするのに対し、『俊頼髄脳』は、歌の詠者を捨てられた伯母とする。これは謡曲『姨捨』と相通じているところであって、『俊頼髄脳』を『姨捨』の本説と推定する根拠とされている。それに加え、『大和物語』『今昔物語集』に見られる伯母が連れ戻される話も『俊頼髄脳』には見えず、この点に於いても、捨てられてそのまま山中に死んだとする『姨捨』の内容に通じるものがある。しかし、こうした類似点だけでなく、話の軸ともいうべき歌を詠むに至った詠者の心情の検討からも本説の所在は探られるべきであろう。『姨捨』のモチーフ歌の歌意を読むためにも、この心情の検討は欠かせまい。

まず『大和物語』（一五六段）では、男が妻に責められて「をば」を深山に捨てたが、長い年月の間、親のように自分を養育してくれた思いが涌いて悲しくなり、さらにその思いが折から上る月を「ながめ」ることによってつのり、よもすがら後悔の念で眠れず、「わが心」の歌を詠んだとある。歌を読んだ後、男は伯母を迎えに行って連れ戻したとする。

『今昔物語集』（巻第三十第九）は、『大和物語』の情況とほとんど変わりがない。ただ、『大和物語』に見える、「昔のごとくにもあらず、疎なること多く、このをばのためになりゆきけり」や「いひ

腹立てけるおりは、腹立ちてかくしつれど」等から読めるような筋立てとともに変わる「男」の心境変化が『今昔物語集』にはまったく見られず、あくまでも「心ニ非デ」疎かになり、「糸惜ガリテ不弃ザリケルヲ、妻強ニ責云ケレバ」仕方なく捨てるようになったと、男の情けが事態の経過を貫いて強調されている。

『俊頼髄脳』は、捨てた動機を、「母のをば年老いてむつかしかりければ」と、単に老いて面倒だという理由だけで、「すかしのぼせて」逃げたとする。『大和物語』や『今昔物語集』の男に見られる情けは省略され、捨てた後でまた立ち返ったときの心の変化も明らかでない。「さすがにおぼつかなかりければ」と、不安になって立ち返ったとあるが、連れ戻したということは記されていない。養育された当人としては、三書中最も非人情な人物と言える。「さすがにおぼつかなかりければ」とあって山に「姪」が戻ったというところには、「わが心」の歌を、捨てられた老女の歌と表現する意図が働いているかも知れない。歌がこの世に伝えられるためには、その伝承者の存在が必要だからである。明らかに伝承説話と思われるプロットであって、本話が俊頼の作為によって改作されているかどうかは不明といってよかろう。ともあれ、本話における歌についていえば、老女が「たゞ一人山のいたゞきにゐて夜もすがら月を見てながめける歌」であって、「此歌をぞうちながめて泣き居りける」とあるから、ただ一人寂しくよもすがら月をながめ、月影に悲しさがつのり、歌を詠んで泣いていたと読める。

以上、姨捨伝説を収める代表的な作品の内容を簡単にまとめたが、ここで注目したいのは、いずれにおいても、月影が詠者の心情に影響していることが窺える点である。『今昔物語集』における月影に喚起される思いについて、高橋文二氏は、「月影は男の心のうちを照ら」し、「月影が男をして夷母を迎えにいかせたのだ」と述べている。[8]『大和物語』や『今昔物語集』の「男」に対する月影のこうした働きかけを認めるならば、当然『俊頼髄脳』における老女の心情にも同様の作用があったと見るべきであろう。『俊頼髄脳』の老女の心の内に照らされた月影は、美的感動を老女に与えたとはとても思えない。この老女の心に姨捨山の月影が呼び起こしたのは、いうなれば月影の下に遠く離れている家族、或いは、過ぎた昔等への切ない思いであろう。この切ない思いによって老女は、心を慰めようがなく、「わが心」の歌を詠み、もっぱら泣くしかなかったと見てよい。こうした解釈は、『大和物語』の男より非人情な「姪」を記し、老女の悲しみを強調しようとした『俊頼髄脳』の潤色意図と合致するようにも思える。『姨捨』の本説を推定するためには、『俊頼髄脳』における老女のこうした心情のありようを見のがすわけにはゆくまい。

次に、『姨捨』の作者が参酌した筈の中世の古今注[9]を考察し、その注釈に窺える「わが心」の歌の解釈の伝統を考えてみる。

まず、『弘安十年古今集歌注』（以下、『弘安十年注』と略す）では、「男」や「姪」でもなく、捨てられた老女でもない、藤原清経という第三者の歌とする。内容的には、清輔本を底本としたという『古今集註』[10]とほとんど相通じていて、二書のつながりを感ぜしめるところがある。ただ、『古今集註』の方が、「此歌ハ藤原ノ清経信濃ノ守ニテサラシナノ里ニスミケルカ都ナル妻ノ恋シキ時シモ月ノ白ヲ見テヨメル歌也」と、より具体的である。仮にこの二書の密接な関係を認めるならば、『弘安十年注』の藤原清経の詠歌の心情も、

月影に喚起されて涌く「都ナル妻」への思いによるものになる。月影によるこうした働きかけは、たとえ情況は違うとしても、『大和物語』や『今昔物語集』の「男」に対する月影の役割と変わりない。

本曲にとってみのがせないものに、『宮内庁本古今集抄』（以下『宮内庁抄』と略す）がある。

大和物語に、信濃国更級の里に、母に送て男有。伯母、とりて養けり。生長の後、妻を設けたりけるが、彼伯母を妻にくみて、「此伯母を捨よ」と云、「しからずは、我にいとまをえさせよ」といひければ、「此妻寂愛なるによりて、伯母を、貴き聴聞ありとすかして、彼伯母こそ母とおもひて過しつるに、妻の云事につきて、峯高き山を逐越てすてゝけり。しかあれども、母には少くて別て、彼の伯母にこそ生立られつるにと思ひて、目もあはずおきゐて、なげきけり。八月十五夜の月くまなく彼山に清み上けるを見て、この哥をばよめりけり。さて、夜もあれくれば、彼所へ行て、伯母を取返してけり。妻をば、はなれにけり。それより、彼山を伯母捨山といへり。もとの名は、かぶり山といひける也。冠巾子に似りけるによりて、つけ侍りけり。月名所也。

冒頭に、「大和物語に」とありながら、『大和物語』とは、二、三箇所違っている。ここで注目してよいのは、妻に責められ、「此妻寂愛なるによりて」伯母を捨てるが、後悔の歌を詠んで伯母を取り返した後、「妻をば、はなれにけり」と、妻と別れてしまったというところである。これは、『大和物語』には見えない。「男」の心に働きかける「月」の力が「男」を改心させたと説話は語ろうとしているのである。極端な男の心境転換である。月と男との関係からいえば、そのような極端な心境転換をもたらしたのは、「くまなく彼山に清み上ける」「八月十五夜の月」のはたらきであったと認められねばならない。そこには「男」を改心させた月の浄化力が強調されているわけである。それは『大和物語』や『今昔物語集』よりもいっそう明確な主題となっているといってよい。先に紹介した高橋氏の解釈は、むしろこの中世古今注の本文についていえると思う。この本文にこそ「月」を眺めることの中世的意味が深く捉えられていると思うのである。「月影は男の心のうちを照らす（浄化する）」というこの説話の主題には、中世びとと「月」との構造がみごとに捉えられている。氏に言及はないが、思うに、その構造は、仏教（密教）の観想法のひとつである月輪観が投影している。姨捨伝説は後景でしかないと思われてきた「月」が人の心に働きかける典型的な説話として中世びとに受容されていたのであって、「月」こそまさに伝説の主要モチーフであったわけである。ただこの説話では、それとともに末尾に「月名所也」と注記することによって、古今歌が「名月賞美の歌」であるという余地を残す解釈を指摘している点は、注意しておいてよかろう。

『六巻抄』の記事は、『大和物語』とほとんど変わりないが、『大和物語』の「昔のごとくにもあらず、疎なること多く」がら始まる男の心境変化の描写が省略されている。なおかつ、「をば」の老醜を憎む嫁の心情描写や夫に告げ口をして捨てることを責める部分を、簡単に「深山ニスツベキ由ヲイヒテ」と縮約する。もっとも、前の記述と重複するから、省略し縮約したとも考えられる。が、強いてその意味するものを探るとすれば、捨てるようになるまでの過

程よりは、捨ててからの話の展開に比重を置こうとする試みの表れとも言える。従って、ここには、捨てた後になって、育ててくれた伯母への恩情に後悔し、明るく照り輝く月光に心を照らされて沸き上がる伯母への思いに、「なぐさめかねつ」という歌をよんだ「男」の心情の切なさが、強調されているように思える。『六巻抄』の著者は、男のそうした心情が『大和物語』のテーマと見て、そう記したのかも知れない。男の切ない思いが強調されれば、それだけ姨捨山の名月の役割も大きくなる。

以上、「わが心」の歌は、「姨捨伝説の歌」として受け継がれているのが圧倒的であり、「名月賞美の歌」としては、わずかに『弘安十年注』のみであるということが判明した。『宮内庁抄』の「月名所也」という末尾注記は、「名月賞美の歌として受容されていたことの痕跡を見せるが、全体からすれば、姨捨山の月の名所たることを記したにすぎなかろうから、『宮内庁抄』も「姨捨伝説の歌」の範疇から出ていない。ただ文献的にはわずかであっても、この歌が「名月賞美の歌」として愛唱されていたという伝統の存在は、本曲の解釈にとって重要であることはいうまでもない。さらに、ここであらためて主張しておきたいのは、いずれの作品もしくは古注においても、人の心に働きかける月影の作用は、たとえその強弱における差はあるものの、認め得るということである。

謡曲『姨捨』は、直接的には『俊頼髄脳』を本説としつつも、『宮内庁抄』に代表されるような姨捨説話の中世的受容のありようを本曲の中に継承・発展させようとした試みではなかったろうか。

四、『姨捨』の老女と月と

次に、謡曲『姨捨』に表れる老女の心理のありようを名月と関連づけて考えてみる。

『姨捨』のシテ（老女の亡霊）は、都から遙々と姨捨山の名月を愛でようと訪ねてきた旅人（ワキ）の前に、里の女を装って現われる。そして隈なき空の景色を眺め、「いかに今宵の月の面白からんずらん」と、今宵の名月に期待を寄せる。ところが、姨捨伝説のゆかりの地をワキに問われることによって、話題は一変し、老女が捨てられてそのまま山中に死んだ話や、その伝説の場所をめぐる今の陰惨な山の雰囲気を語るセリフが暫く続く。これはまさに、老女自らの心象風景の描写と見るべきであろう。名月に対する期待感満ちたセリフから、本稿の冒頭に挙げたような、陰惨なセリフへのトーンの急転換は、ワキのこの問いによるものということに注目したい。引き続き、ワキが名月を賞美しようとして遠くより訪ねてきたことをシテは喜び、ワキの夜遊を慰めようと約束する。そして、自分の正体や「執心の闇を晴らさんと」仲秋ごとに出現することを明かし、姿を消す。これまでが前場である。

後場に入って、名月が出、旅人たちが先ずその「面白」に興じる。そこに老女の亡霊が登場し、同じく名月の「面白」を賞美する。しかし、旅人たちが専ら興に乗じているのに比べ、老女は、名月を賞美しながらも今の折が過ぎ去ることを早くも予想して惜しみ、感動の絶頂の半面に今の折に対する並々ならぬ執心を漂わせている。そして老女は、「昔とだにも思はぬぞや」（昔捨てられたときと同じ月だとはとても思えない）[11]というセリフを付け加える。昔の

月は、捨てられたという実感のもとに、悲しく淋しく眺めた月であろう。その月も美しい名月ではあったが、故郷への思いを喚起する月でもあったはずである。要するに、感動と悲しみを同時に味わせた月だったと見てよい。前場において、ワキに伝説のありかを問われたとき、陰惨なトーンのセリフに転調した所以も、月の半面におけるこのような翳りにあるであろう。

〔掛け合〕に入って老女は、ワキの誘いに導かれ夜遊に身を委ねるのだが、〔上ゲ歌〕に入り、次のような詞章があらわれることは見逃せない。

盛り更けたる女郎花の　〳〵　草衣しほたれて　昔だに捨てられしほどの身を知らで　また姨捨の山に出でて　面をさらしなの　月に見ゆるも恥づかしや　よしやなにごとも夢の世の　なかなか言はじ思はじや　思ひ草花に愛で　月に染みて明かさん

「月に見ゆるも恥づかしや」は、前に『申楽談儀』に言及されている芸談として触れたが、「何でも知っている月に見られるのが恥かしい」という伊藤正義氏の解釈は、[12]『申楽談儀』の「月を本に」すべきだという世阿弥の論と通じるものと考えられる。この〔上ゲ歌〕からは、老女は己の老醜を嘆き、昔捨てられたことを辛い思いとして胸中のかたわらに秘めていることが読めるが、前に「昔とだにも思はぬぞや」といったときの昔への思いのありようが、こうしたところからも説明される。このような思いが、「何でも知っている月」に照らされて、明るみに出ることを恥じらっている。老女は、月を単なる美的対象として眺めるわけではなく、それにある種の力を感じている。前場の終りに「執心の闇を晴らさんと」名月の出る仲秋ごとに現われるのだと明かしたのも、満月に己の執心を晴らす力を求めての言葉である。老女にとっての姨捨山の月とは、美的対象であるにとどまらず、それ以上に、ある超越的な存在として、人の心に働きかける力を持つものでもあるという意味が、この「月に見ゆるも恥づかしや」に秘められているのである。しかし、その直後に「よしやなにごとも夢の世のなかなか言はじ思はじや」と、一転して全てを諦めようとするセリフをはくのは重要である。「よしや」は、気を取り直す意の発語であることに注目したい。文脈からすれば、老醜、捨てられた恨み、さらには死後までも持ち続けている闇浮への執心等々、それらを断ち切って名月の賞美に浸ろうと試みるといった、いわばセリフの転調が読み取れるのである。この急激な転調は、老女の眺める「月」が、超越的な月から一転して、美的感動を味わせる名月へと変わったことを意味している。月に己の執心を晴らす力を求め、なおそれに美的感動を求める。一見矛盾した方向に老女の願望は引き裂かれる。ここに老女の心理における二律背反が起こる所以がある。この〔上ゲ歌〕の二つの詞章は、老女の心に即しつつも、本説に系譜する「月」の二義性を引き受けてあますところがない。「月」を前にして、老女の心は、いわば「浄化」と「美」との間に揺れているのである。

やがて、〔クリ〕〔サシ〕〔クセ〕に入って、老女は、名月への興が高まったあまり、月を大勢至菩薩に見立て、ついには、いうなれば「浄土幻想」を見る。特に〔クセ〕の初めの、

さるほどに　三光西に行くことは　衆生をして西方に　勧め入れんがためとかや　月はかの如来の　右の脇侍として　有縁をことに導き　重き罪を軽んずる　無上の力を得るゆえに　大勢至とは号すとか

というくだりは、曲舞に系譜する詞章とみられるが、それは単に大勢至菩薩を賛嘆するだけの詞章では決してない。宗教的陶酔境にある老女の心をはやす詞章と見ねばならない。老女の姿態には、西方浄土への憧れが漂い、「執心の闇」を晴らさんという目的が窺えるかくて老女は、極楽浄土の輝かしい幻想を垣間み、一瞬救済される至福を味わう。しかし、浄土幻想を見る老女の歓喜は、いつまでも続くわけではない。老女は幻想から醒めてしまうのである。「浄土幻想」からのこうした覚醒は、次のような〔クセ〕の終りのくだりから読める。

光も影もおし並めて　到らぬ隈もなければ　無辺光とは名づけたり　しかれども雲月の　ある時は影満ち　またある時は影欠くる　有為転変の世の中の　定めのなきを示すなり

幻想の果てに、老女は月を「無辺光」（大勢至菩薩の別称）と観じるに至るが、「しかれども」という逆接の接続詞に続く転調により、老女の陶酔は醒めたとみてよい。幻想から醒めた彼女にとって、月はもはや「無辺光」ではなく、単なる日常の月としての「雲月」に過ぎない。この覚醒には、前述のような老女の心理における背反が働きかけているのであろう。（このくだりについては、次の節に更に述べる。）

彼女にとって月は、もはや執心の浄化力への願望を越えて、却ってその皓々たる光によって、心の奥底に秘めた昔へのなつかしき思いを照らし、それを呼び起こすのである。「月」は彼女の心に愛執をかき立てる。引続き、

昔恋しき夜遊の袖

と歌って、老女は切ない昔への思いを乗せた「序の舞」を舞う。「月」の美が彼女の執心をかき立てての舞である。永劫に中有にさまよわねばならない老女の悲しみがこの「序の舞」には秘められているとみてよい。ここの「昔」は、捨てられたときとは限らず、それ以前のときをも含んでいる。そして老女は、昔よんだ「わが心」の歌をもう一度詠む。この歌は、前場にも捨てられたその昔詠んだとして引いてある。しかし、今舞台上で詠んでいる歌と昔のそれとの間には、意味上の隔たりがある。今の「なぐさめかねつ」心には、昔のその心に加えて、どうしても捨て切れないこの世への「執心」が添加される。その「執心」を月の浄化力にすがって浄めようとしたが、月そのもののもつ「美」の反作用により、却って「執心」は喚起されるのである。老女は月に救済を求め、救済されず、[13] 却って喚起される「執心」がいやますことに「なぐさめかね」るのである。かくて彼女はもはや救済を諦めたためか、

返せや返せ　昔の秋を　思ひ出でたる　妄執の心　やる方もなき　今宵の秋風　身にしみじみと　恋しきは昔　偲ばしきは閻浮の　秋よ友よ

と、中有にさ迷う亡霊としてのこの世への激しい「執心」に苛まれる。やがて、夜が明けはじめ、昔と同様に老女はまた一人山中に残されて、『姨捨』一曲は終るのである。

五、『姨捨』の「詰め」

ここでは前にみた〔クリ〕〔サシ〕〔クセ〕の部分に本曲の主題を構成するプロットがあることを、世阿弥の作能論から補っておく。そして、〔クセ〕の終りに見られる前述のような急激な心境変換にこそ主題があることを明らかにする。

世阿弥の作能論に、一曲のクライマックスを意味する「詰め」と「本説」との相関を述べている所がいくつかあるが、「本説」と「詰め」の仕組に関する具体的な方法論を、作能論におけるキーポイントとして子の元能に言い聞かせたのが『三道』の次のような記述である。

能には、本説の在所あるべし。名所・旧跡の曲所ならば、其所の名歌・名句の言葉を取ること、能の破三段の内の、詰めと覚しからん在所に書くべし。是能の堪用の曲所なるべし。

末尾の文句の「是能の堪用の曲所なるべし」という所からして、この部分は、能を作ることにおける基本的な心得になっていたと見てよい。『姨捨』も「名所・旧跡によって作られた曲」であるから、逆に言って、その土地の名歌の「わが心」の歌が取り入れられている所が、この作品の「破三段の内の、詰めと覚しからん在所」であると推定することが許される。それに加えて、曲全体の構成からして、「わが心」の歌が置かれている所が「破三段」の内の山場あたりと言えるので、前述のごとき推定は、より妥当と考える。よって、謡曲『姨捨』における「詰めと覚しからん在所」は、〔クセ〕の終りから「わが心」の歌までと考えられる。

〔クセ〕は、シテが姨捨山の名月の清明さに照らされて、月の本地仏たる大勢至菩薩を観想するセリフから始まる。そして、その大勢至における「有縁をことに導き　重き罪を軽んずる　無上の力を得」られる仏徳を語り、絢爛たる極楽浄土の描写に入る。これはシテの心理の推移からすれば、月輪の浄化力に寄せるシテの欣求浄土の心理が強く伝わってくるところと察せられる。

ところがそうした老女の心の志向性には、前にも述べた通り、ここで大勢至の別称である「無辺光」から「雲月」へといった転換があったと読み取れるのである。つまり、「浄土幻想」の陶酔から一転して日常の意識へと覚醒するのである。覚醒した目から眺めた月は「雲月」であって、それはまた世の儚さを示すものであった。それは、「しかれども雲月の　ある時は影満ち　またある時は影欠くる有為転変の　世の中の　定めのなきを示すなり」という月の満ち欠けから諦念される老女の無常感として表わされている。つまり、世に儚さを感ずる日常の意識世界に突き戻されるのである。そしてもっぱら「昔恋し」き心情を舞に乗せ、「やる方もなき　妄執の心」に苛まれ、老女の心情は「なぐさめかね」るのである。それは中有をさまよう老女にとって永劫に繰り返される飛翔と回帰なのであろう。

そのような老女の内面にさすいわば光と影とは、月の二面性に基づくものであることが読みとれる。「月」はまさに救済の光と美の光といった、相反する光を老女に照らしかけるのである。老女における姨捨山の月は、その清明さの持つ宗教的浄化力を感ぜしめる一方、日常の月としての「雲月」の示す移り変わる位相によって、世の無常を感ぜしめ、却ってこの世への執心を喚起するという面をも持つ。「雲月」が老女自らの迷妄する心象風景の中の月であってみれば、老女は、自ら己を迷妄の悲しみに閉ざし込んでいると見るべきであろう。老女の内面においては、「雲月」の美が老女の心を魅き寄せ、現世への執心に駆り立てるのである。老女における「雲月」の「雲」とは、まさにそうした迷妄の象徴と見るべきであろう。現世への執心が救いへの願望に勝り、その「やるかたもなき妄執の心」に老女は嘆くのである。結局、月の二面性を見たのも老女自ら

であってみれば、終局に、昔と同じように、再び捨てられるようになるのも、老女自身の屈折した心理によるものにほかなるまい。こうした老女の境遇は、御伽草子『小町草紙』に業平の語る女性一般の境遇を思わせるところである。

さらぬだに、女は罪深くして、業障の雲あつく、真如の月も晴れやらず。心の水も濁りつゝ、思ひと思ふことは、悪業煩悩の絆なり。(14)

『姨捨』の老女も、「雲月」のまわりにさしかかる雲に、「真如の月」へ向かう心が包まれたのであろう。それによって、老女の「心の水」は濁り、屈折し、煩悩から逃れ得ないでいる。そして、煩悩しながらも、「やる方もなき妄執の心」を抱く、自らの矛盾した内面に、老女は「慰めかね」るのである。こうした老女の心理的葛藤が描かれているところに、『姨捨』一曲の「詰め」はおかれているのである。

六、結　び

これまで考察して見た通り、モチーフ歌における歌意の解釈の二つの方向性は、本曲の本説の世界（以下、「本説群」と略す）においては、「姨捨伝説の歌」として理解されたのが圧倒的であったが、世阿弥の謡曲『姨捨』に至っては、モチーフ歌の二つの解釈がシテの心の屈折を映発するかたちで内面化され、脚色・創作されているのである。救済への願望にもまさる名月への「執心」とは、それこそ切ない愛執に他なるまい。中有の存在としての老女の亡霊における「わが心」の歌とは、他ならぬ「名月賞美の歌」なのである。

ところが、本曲の本説群に「姨捨伝説の歌」としての潤色或いは理解が圧倒的であるとしても、それらに一貫して窺えるものは、詠者の心情への月影の働きかけであった。世阿弥は『姨捨』の本説を求めるに当たって、本説群を貫いて窺えるこうした月影の働きかけに着目したのではなかろうか。

世阿弥能楽論の『三道』に、

又、作能とて、さらに本説もなき事を新作にして、名所・旧跡の縁に作なして、一座見風の曲感をなす事あり。是は、極めたる達人の才学の〔態〕なり。(15)

とある。読み人も詞書もない『古今集』の歌を本説とした『姨捨』であってみれば、『姨捨』も「作り能」に近いと言えよう。それを「名所旧跡の縁に作りなして」一座の見物の感心をかち得ようとした世阿弥の試みが、前に述べた『姨捨』一曲の「詰めと覚しからん在所」に表れていると考えられるのである。つまり、世阿弥は、人の心情への月影の働きかけに着目して、老女の名月への愛執を描こうと試み、「詰めと覚しからん在所」に、救済への願望にもまさる名月の「美」への愛執故に救済されず、却って激しい妄執に陥ってしまうといった、劇的な展開を設定したと考えられるのである。こうした構成にこそ、「一座見風の曲感」をかち得ようとした世阿弥の狙いは表れ、このようなところに『姨捨』一曲における彼の「極めたる達人の才学の〔態〕」は、発揮されたと見るべきであろう。本曲の主題とは、以上のように、名月への愛執故に救済されぬ老女を描き、「詰め」に見えるこうした構成によって、その愛執の切なさを強調しようとしたところにあると考えられるのである。

注

(1) 小西甚一、「作品研究〈姨捨〉」(『観世』昭和四五・九)

(2) 伊藤正義校注、古典集成本『謡曲集』上、「各曲解題」四一九頁。

(3) 小山弘志他校注、古典全集本『謡曲集』一。

(4) 本文引用は、前掲古典集成本『謡曲集』に拠る。以下同じ。

(5) 岩波思想大系『世阿彌・禅竹』補注一六四参照。

(6) 同前書、二六八頁、頭注。

(7) 市村宏「姨捨—能と文芸地理」(『宝生』昭和三六・一〇)に詳しい。

(8) 高橋文二、「王朝女流文学に表れた月影の視点」(『国語と国文学』昭和五一・一〇)。

(9) 片桐洋一『中世古今集注釈書解題』(赤尾照文堂、昭和四六年)によれば、「わが心」の歌の注釈は、『弘安十年古今集歌注』『宮内庁本古今集抄』『六巻抄』『両度聞書』『古今和歌集灌頂口伝』『蓮心院殿説古今集注』などに見えるが、『姨捨』の作者とされる世阿彌の年代と注釈書の成立時期を考えて、ここでは、前三書を考察の対象とする。

(10) 「未刊国文古注釈大系」第四巻所収『古今集註』に拠る。

(11) 古典全集本『謡曲集』上、四二〇頁。

(12) 古典全書本『謡曲集』上、二四一頁。

(13) 相良亨、「『姨捨』の孤絶」(『季刊日本思想史』第二四号、一九八四)八三頁。

(14) 市古貞次校注、古典大系本『御伽草子』九一頁。

(15) 引用文は、前掲『世阿彌禅竹』一三四頁より。

(筑波大学博士課程　文芸・言語研究科文学)